

青い草

小川未明

青空文庫

小さい姉弟は、父の目が、だんだん見えなくなるのを心配しました。

「お父さん、あのカレンダーの字が、わからないの？」と、壁の方を指していったのは、もう前のことであります。お父さんが、会社をやめてから、家の内にも夜がきたように暗くなったのです。

「私の故郷へ帰りましょう。田舎は、都会とちがつて、困るといっても、田はあるし、畑があるし、まだゆとりがあります。いけば、どうにかならないこともありますまいから。」と、子供の母親がいました。

「お母さん、田舎へ帰るの。」と、姉のとし子は、お母さんの体へすがりながらききました。

「ええ、帰りましょうね、そうするよりしかたがないんですもの。」

お母さんは、みんなの気持ちを励ますつもりで、いいましたが、また、すぐに涙ぐんでしまいました。

「おれに故郷があるとなあ。」と、父親は、瞳が白くなつて、生気を失った目で、あたりを見まわしながら、答えました。お父さんには、もう、両親もなければ、また帰る

べき家もなかったのでした。

「どちらの田舎へ帰っても、同じでありませんか？ 私の兄はあのとおりしんせつな人ですし、まだ母も生きていますし。」と、お母さんはいいました。

「そうすれば、僕、田舎の学校へ上がるの。」と、義坊が、ききました。

「おまえも田舎の子になるのよ。山へいったり、野原をかけまわったりして、きつとじょうぶになりますよ。とし子は、もうあと二年ですから、卒業したらお裁縫でも習え。ばいと思います。」

父親はだまって考えていたが、

「できるなら、子供たちをこのまま、こちらで勉強強さしてやりたいものだ。」といいました。

「あなた、それができるようなら、これに越したことがありませんけれど、そのお体でこの先どうしてやっていきますか？」

母親は、自分になんの力もないのを、面目なく思ったのです。

「なに、私にだつてすこし考えがある。」

父親はさびしく笑いながら、二人の子供のいる方を向いて、

「おまえたちは、お母さんの田舎へ帰ったほうがいいか、それとも、こちらで、いくら不自由にしても暮らしたほうがいいか、どちらがいいかな？」とききました。

もうまったくの子供ではなく、いくらかものわかるとし子は、この際いかに負けぬ気であつても、それはむだなことと思ひました。それよりか、お母さんのおつしやるように田舎へ帰つて、自分はどんな手助けでもするから、一家のものが、無事に暮らしていけることを願つたのでした。

「私はお母さんの田舎へいったほうがいいと思ふわ。」と、とし子は、答えました。

「僕は、賢ちゃんや、正ちゃんとは別れるのはいやだから、こつちにいるほうがいい。」

今年から、小学校へ上がったばかりの義坊がいました。

父親は、手さぐりで義坊の頭に手を置いて、

「義坊や、おまえと二人でこちらにしようか。」

「お父さんと、お母さんと、別れるのはいやよ。」と、とし子は、泣きながらいました。

母親もだまつて、そつと目の涙をふきました。

「まあ、私はやつてみる。こうなれば、恥も外聞もない。明日からでも、町の角に立つて、尺八を吹くつもりだ。」

日ごろから、お父さんの尺八に感心している一家のものだけれど、世間の人たちが、はたして自分たちと同じように感心するか、また感心はしても、金を恵んでくれるだろうか、まったく見当がつかなかったのです。

「お父さんは、うまいんだから、みんながきつと、お金をくれるよ。」

「この時節ですもの、なんでお金になどなりますものか。」と、お母さんはいいました。

町の角に石造りの銀行がありました。前に、三坪にも足らぬあき地があつて、そこへ青い草が芽を出しました。低い柵には鎖が張られていたが、大人なら造作なくまたいで入ることができたのです。義坊の父親が立つて尺八を吹くのはその柵のところでした。「いつか、よつぱらいが、たおれていたところへ草が芽を出した。」と、義坊はいいました。どこのおじさんであつたか知らないが、お勤めの帰りによつぱらつたとみえて、黒い外套は泥だらけであつたし、握っている洋傘が、折れそうに、曲がっていました。巡査が見たら、なにかいうであろうと、義坊は、心配をしたが、そのとき、巡査は通つたけれども目に入らなかつたようです。その後、雨が降りつづきました。その雨で草が生えたのでありましょう。

土曜どようの日ひには、早くはやからここへきて、父親ちちおやは尺八しゃくを鳴ならしたのです。

ふいに、義坊よしぼうが叫さけびました。

「あつ、あんな花はなが咲さいた！」

小さな白しろい花はなが、草くさに咲さいたのであります。ガラス窓まどのうちで、仕事しごとをしている人ひとにも

また、この鋪道ほどうを通とおる人々ひとびとにも、おそらく、この花はなは知しられなかつたでしょう。ただ、

これに氣きのついたのは、自分じぶんばかりのように思おもえて、義坊よしぼうは、なんだかうれしくてしか

たがなかつたのです。

彼かれは、柵さくの下したから頭あたまを突つつこんで、腹はらばいになつて、その花はなを取とろうとしました。こん

な遊びあそびは、原はらっぱでもなければされぬことで、このにぎやかな町まちの中では、まったく珍めづらし

い、しがいのあるいたずらにちがいありません。義坊よしぼうは手てを伸のばして、その白しろい花はなを取と

ろうとしました。その瞬しゆん間かんです。どこから飛とんできたか、朽くち葉色ばいろのちようが、花はなに

止とまろうとしました。義坊よしぼうは、おどろいて急きゆうに手てを引ひつこめて、ちようのするさまをじ

つと見守みまもつていました。ちようは花はなにとまつて、羽はねを休やすめたかと思おもうと、また舞まい上あがつ

て、煤煙ばいえんと物音ものおとで、かきにごされている空そらを、どこともなく飛とんで消きえてしまいまし

た。その行方ゆくえを見送みおくりながら、義坊よしぼうはぼんやりとして、不思議ふしぎに思おもつたのです。そして、

ちようのために、白い花を残しておく気になりました。

「義坊や、あつちのお店では売れたかな。」

二間とは離れぬところへ、赤い珠と、白い珠と吹き上げるおもちやの噴水や、ばね仕掛けのお相撲の人形を売る、露店が並んでいたのでした。

「さつき、子供がたくさん立っていたが、だれも買わずにいつてしまったよ。」

「そうか、不景気だなあ。」と、父親は、ため息をつきました。まだ、今日は一人も銭を投げてくれなかったのです。

義坊は、以前、いろいろなおもちやを父親から買ってもらったことがありました。

しかし、いまは噴水や、相撲の人形などを見ても、自分には縁の遠い気がしたし、べつにほしいとも思いませんでした。ただ、そんなおもちやを買うことのできる子は、しあわせな子供と思っていました。デパートの屋根には、アドバールンが高く上がっていました。風が寒く、雲が低かったのです。近所の店で鳴らす、蓄音機の音が、いつかお母さんの田舎へいったとき、丘の下の小学校で、女の先生がひいていたオルガンの音を思い出させました。

その先生は、紫色の、長いたものついた羽織を着ていました。

「お父さん、不景気でだめだから、お母さんの田舎へいこうね。」

義坊は、こういいました。なぜか、お母さんの田舎へいこうという不幸な父親は、いつでも、だまってしまふのです。

「また雨かな、だいぶ寒くなつた。もう、すこしやつて、お家へ帰ろうな。」
父親は、尺八を持ち直して、思いきり深く息を吹き込みました。

うさぎ追いしかの山 小ぶな釣りしかの川

夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷

道を急ぐ人々の中には、立ち止まって、じつと耳をすます青年がありました。また、女の人がありました。その人たちは、しまいまでその歌に聞きとれていました。

こころざしをはたして いつの日にか帰らん

山はあおき故郷 水は清き故郷

と、父親が、うたい終わつたときに、あちらからも、こちらからも、お銭が二人の前に落ちたのであります。義坊は拾うのに夢中でありました。

やがて、草の白い花が、うす闇の中にほんのりとわからなくなるころ、哀れな父親のたもとにすがりながら、勇んで帰つていく子供がありました。それは義坊であります。

沈^{しず}みがちに歩^{ある}く父^{ちち}親^{おや}に向^むかつて、

「ねえ、お父^{とう}ちゃん、きょうはよかったね。また、あしたもあんな歌^{うた}を吹^ふきなさいよ。」

と、いったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院

1941（昭和16）年4月

初出：「教育行童話研究」

1938（昭和13）年4月

※表題は底本では、「青《あお》い草《くさ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年3月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い草

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>